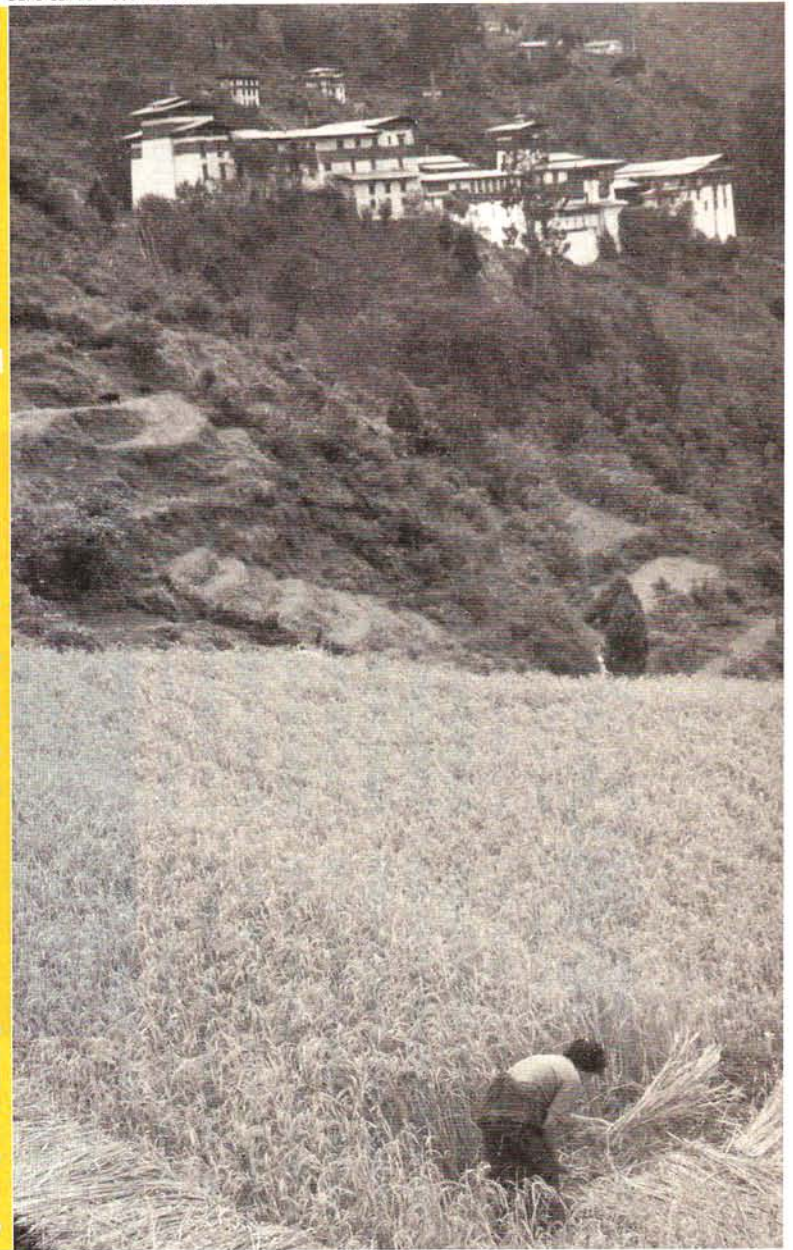


David Samuel Robbins / CORBIS



稲を刈るブータン女性。背後は最も美しいといわれるトロンサ城

ブータン発「国民総幸福量」という価値観

■経済学者もようやく注目し始めた

日本が高度成長にとっぷりと浸かり、世界が浴びせる経済大国の絶賛に浮かれ、忍び寄るバブルの狂気に阻まれ始めた頃。「Gross National Product (国民総生産量)よりGross National Happiness (国民総幸福量)のほうが大切だ」と言い出した一人の青年がいた。処はヒマラヤ連峰の懐、インド・アッサム平原と中国・チベット高原に

抱かれたドウルック・ユル(雷龍の国)、別名ブータン王国。青年の名はジグメ・シンゲ・ワンチュク、ドウルック・ギャルポ(龍王)、即ちブータン国王である。鎖国を解きブータン近代化の基礎を築いて名君と慕われた父君急死の悲しみの中、一九七二年弱冠十六歳で即位した青年国王は、前国王の遺志を継い

で旅の途上にあつた。中世物々交換経済の状態に酷似し、信頼できるデータなど全くない自国のために、開発五年計画を立て直す準備が目的の巡幸であつた。南は海拔百メートル前後の熱帯ジャングルから北は七千メートル級のヒマラヤ連峰まで、直線距離にしてわずか二百キロ足らず。その国を、水河の解

け水とモンsoonで膨れあがつた激流が無数に貫く。面積は九州程度とはいえ、起伏の激しい国土。そこに七十万人に足りない農民が、日照時間の多い山肌を求めて人口密度一平方キロあたりたった十五人程度で散らばっている。立体地図上では必ずしも小国とは言い切れぬ厳しい環境に加え、当時道も車も皆無に近かつた国中を、国王は舐めるように歩き回っていたという。

「英明君主」の深い洞察

ブータン中「龍王の足跡のない村はなかった」と語り継がれる巡幸のある日、ツツジとシヤクナゲの大木が聳える山間を歩きながら、国王は側近に語つた。我が国の民は物は貧しくとも心は豊かだ、と。そして、近代化がもしもこの豊かさを脅かす時が来たら雷龍の国は滅びていく、と。まさに今、日本その他の先進国が抱え悩む数々の病を見通した、と言つても決して大袈裟ではない、深い洞察であつた。

それ以来ブータンは、国王自ら国民総生産量をもじつて「国民総幸福量」と名付けたヴィジョンを、改革と発展の国家最高目標として悠然と追求し続けてきたのである。

「国民総幸福量」の概念は、こう説かれていた。目的と手段を混同してはいけない。経済成長自体が国家の目標であってはならない。目標はただひとつ、国民の幸せに尽きる。経済成長は幸せを求めるために必要な数多い手段のうちのひとつでしかない。そして、富の増加が幸福に直接つながると考えるのは間違いである……。

一九九九年にブータン計画省が発表した第九次五カ年計画のウィジョン声明「ブータン二〇二〇」は、「国民総幸福量の概念は、人間を経済発展に関するすべての努力の中心に置く」と述べ、「幸せへの鍵は、ある程度の消費満足を得た時点で人間が必要とするいろいろな非物的満足感、特に情緒、感情、精神的な満足にある」と断言する。経済発展の戦略は、物的な次元と非物的な次元のバランスを保つ軌道にあるべきだと位置づけられている。人々の幸せに満ちた生活を可能にしてくれる自然環境、精神文明、文化伝統、歴史遺産等を破壊し、その上家族や友人と地域社会の絆までも犠牲にするような経済成長は、人間の住む国の「成長」とはいえないと論ずるのである。「国民総幸福量」には、自我の抑制が

国民の幸せにつながるの価値観がある。人間の物欲は限度を知らず、身勝手な欲は社会の不均衡と自然破壊をおこす。自我の抑制と「すべての生物に対する思いやり」なくしては、幸せに必要な環境を築き持続する事が不可能だと考えるからである。

「もつとも」と頷ける概念ではあるが、エコノミストにとつてはずいぶん型破りな発想であった。

近代経済学は、成長によって富が増え消費量が上昇すれば個人の満足度(welfare)が上がると考える。かといって、その満足度とはいったい何なのか、人間の幸せとどう関係があるのか、というところまでは理論は踏み込まない。そこからは心理学等の他の分野の課題だ、という姿勢に甘んじてきた学問なのである。「富の増加が幸福に直接つながると考えるのは間違いだ」とわかっているにもかかわらず、そういう概念を真正面から受け止めようとする理論体系がすっかりしていない。したがって、「国民総幸福量」はエコノミストにとつて、型破りどころか耳の痛い話でもあった。

人間の立場からホリスティックに世の中を見る努力をあまりしない近代経済学は、日本政府によく似た縦割りの

な観点の学問だと言っても言い過ぎではない。人間を「中心に置く」とはつきり宣言する「国民総幸福量」の全体横割りのな観点とは、異質なものと考えていいだろう。

異質だからこそ、何かを学びとろうと耳を貸すには時間がかかる。ブータンがアジアの秘境にある小国ということも手伝って、「国民総幸福量」は経済学の世界で、知る者はいても一笑に付されるか無視される状態に長くあった。しかし、そうして約三十年経った今日、「国民総幸福量」がエコノミストの間で認められ始めている。

めざましい経済発展

そもそもこのきっかけは、経済成長に伴いがちな社会病、環境・文化・文明破壊が、地球レベルの問題として出てきたことであつた。約七年前、少数の援助機関やNGO活動家が、ブータン発「国民総幸福量」に注目し始めた。事実、アジア開発銀行千野総裁がブータンにまず足を運び、ウォルフエンソン世界銀行総裁も昨年、総裁として初めての公式訪問を(それも四泊五日とブータンのような小国には前代未聞の長期にわたって)果たしている。

その背景には、実はもっと重要な要素があつた。ブータンの経済発展のめざましい成果である。

GNPに視点を置くエコノミストがまず気付いたのは、ブータンの年率平均七パーセント前後の高度成長とその長年にわたる持続力であつた。アジア開発銀行のあるエコノミストは「知らないうちに、国民平均所得が南アジア地域のビリからトップにのし上がつていた」と打ち明ける。高地を利用した電力と、農産物を主に輸出し、一人あたり年収六百ドルを超したばかりというものの、最初は「ブータンがインド、パキスタンを抜くなんて、統計の間違いかミスプリントだろう」と、わざわざ問い合わせを恥をかいたと笑う。興味をもつた彼らが次に驚いたのは、環境破壊が世界的な問題として浮上するよりはるかに昔から、ブータンが世界一流ともいえる自然環境保護政策を「静かに」実施していた事実であつた。

たとえば森林面積は、国土の半分を下回つていた時点から十年も経ずして世界一、二を競う約七割まで拡大していた。不足している外貨の大きな源となりうる木材輸出は、自然保護のために全面禁止となつていた。一度は五カ

年計画に入れた鉦山開発大型プロジェクトまでも、数々の豊富な鉱物資源が眠っているのを察知しながらもあえて撤回していた。利害関係などいろいろな葛藤はあった。しかし、すべて官民一体となり「国民総幸福量」のヴィジョンに沿った決断であった。

これらの事実は「国民総幸福量」が政治家や官僚のレトリックではない、と鮮明に物語っている。これを見て、エコノミストたちは、ブータン王国は本気だと気付いた。その上、あまり遠くはない昔に貨幣のない物々交換だった経済が、世界銀行のランク付けで他の発展途上国を大きく抜いてトップに躍り出た事実が驚き、現地調査にくり出すエコノミストが増えていった。

ブータンに出張した彼らは、予想もしなかった経験に出くわした。精神的といってもおかしくない情緒体験の感動に打たれたのである。国籍さまさまのエコノミストが、皆口を揃えたように「自分の心のふるさとに帰ったように思えてならない」と報告しはじめた。ある日本人エコノミストは「明治の富国強兵以来百三十年余り、僕ら日本人が得たものはいったい何だったのだろうか」と考え込んだ。経済学と、「国

民総幸福量」が重んじる「非物的満足感」の出合いがそこにあった。

そうした流れを汲んで、ブータンと日本の学者たちが「国民総幸福量」の基礎研究を昨年度末から開始した。ブータンの首都ティンブーにあるブータン研究センターと東京の経済産業研究所が、現在共同研究の準備を進めている。日本の改革とこれからの発展への、中長期戦略方向を示唆する重要点をブータンの経験から学びとることを目的として、「国民総幸福量」の理論的体系を位置づける考查と共に、指数化の可能性についても研究を進めるそうだ。国王は研究意図を聞き及んで、この研究はブータンの国家安全保障戦略に大きな意義をもち、また日本の将来に何か示唆することがあれば我が国にとつてこのうえない光栄である、と語った。「国民総幸福量」の元祖としての喜びはさぞ大きなものだったであろうと想像がつく。

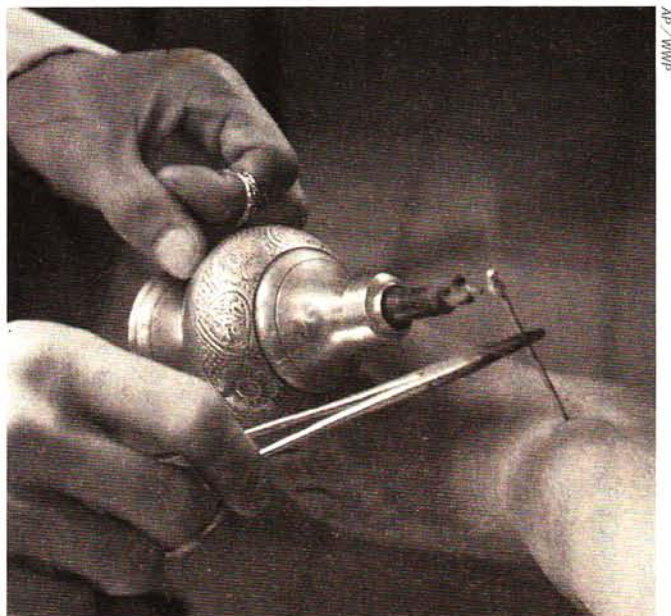
教育用語は昔から英語

ブータン近代化の歴史と成果を知る人々は、行政に一貫して見える三点を必ず指摘する。第一に、先見性の高い「先取り」をする行政。第二に国民の

立場にたった「思いやりのある」行政。そして第三に、良い「ガヴァナンス」、即ち清く透明な政治である。

先見性の高さは、前記の自然環境保護政策だけでなく、教育制度にもみられる。「国民総幸福量」はまず良い教育から、と教育熱心なブータンであるが、教育用語はとうの昔から国語のゾンカ語ではなく英語を選んでいった。多様な言語が入り交じるという国状もあるが、数十年前の近代化初期に、すでに国民の国際社会への対応力を考えてこの政策をとっていたというから、猛烈な「先取り」である。国際会議などでのブータン人の流暢な英語は、言葉の壁が国全体の発言力を低くしている日本人にとって羨ましい限りである。

保健衛生制度の近代化にも熱心で、ブータンの保健所や病院では東洋医学と西洋医学の医師団が仲良く患者を診



ティンブーにある伝統医療研究所での鍼治療

ている。西洋医学を恐れる老人や田舎の人々への「思いやり」から東西両立制度にしたそう。東西医師団揃って祈りや精神状態の治癒力を信じ、患者が鍼と麻酔薬、抗生物質と漢方薬などと選択のできる制度になっており、今にして言うホリスティック医学を「先取り」したように思えてくる。

医学博士ジグミ・シンゲイ衛生大臣は、ハンセン病(数年前撲滅に成功した)対策に関して「そこまでしなくても批判された」と苦笑する。患者の



Reuters 2004

出た村には僧侶の加勢も仰いで説明を徹底的にし、社会人として生活しながら病を癒せるように一人ずつ計らったという。「幸いに皆やさしく理解してくれて、村八分など一件もなかった」

そうだ。仕事や家庭事情などで薬を取りに来る事ができない患者には、どんなに不便な所でもこちらから出向いた。日本のハンセン病患者に対する冷たい措置と暗い歴史とは雲泥の差であるが、

「国民への奉仕が公職に就く者の使命。あたりまえの事をやっただけです。この姿勢が国民総幸福量の精神であり神髄なので」と大臣は語る。先見性が高く思いやりのある行政は、良い「ガヴァナンス」につながる。「国民総幸福量」の精神は経済開発事業のみにとどまらず、政治改革にも及んでいる。現在、ブータンの政治制度が世界史上稀ななりゆきで大改革の過程にある事実を知る人は少ない。国王自ら

の先導で、絶対王制から立憲君主国・民主主義体制への改革が着々と進んでいる。幸せを追求するためには、国民一人一人の積極的な政治参加が必要だという信念に基づく政治改革である。

成功の源は「草の根の民意把握」に

特に個々の村のレベルまで浸透する地方自治の確立を優先し、中央集権制度を根こそぎ引っくり返す改革に力を注いでいる。前ウオンディ・フォダン県知事、ペム・ドルジ労働省次官はこう語る。「知事だつて人間だ。改革以前は国王に任命され大臣扱い。正直、権力を失うのは嫌だった。しかしそれは国を想う民の心ではない。幸せは自分たちの手で築き、守ってゆかねば。国民総幸福量の精神は草の根の正しい政治にある。根っこが腐つたら国が滅びる。やりがいのある奉仕だった」。史上初の地方選挙は昨年滞りなく終了し、第九次五カ年計画を草の根の自治体から積み上げる大事業も完了した。現在、政府役人が正しい税金の使い方を地方政治家たちに説明し実習訓練しているという。あの国王の旅の如く、村から村へと回りながら。三十年前の巡幸に随時同行した前計

画大臣ドルジ大使(バンコク駐在)は、当時を振り返って「国民総幸福量という発想と今日に至るその成功の源は、国王自ら熱心に打ち込まれた草の根の民意把握にある」と語る。「国民総幸福量は国王が押し付けたと考えるのではない。大失敗も幾つかあった。しかし、国民が皆心から共感できるウイジョンだったからこそ失敗は学習の糧として近代化の苦しみも喜びと共にわかちあい、バランスのとれた発展と平和をなんとか保つてくることができた」。

「陛下のような立派なリーダーを君主と仰ぐことができる私たちブータン人は、世界一の果報者だと思っている」と大使は結んだ。ブータン・日本共同研究の結論を待たずして、我が国への示唆がすでにこの言葉に見えてくる。国民の幸せには、良い「ガヴァナンス」を実らず正しい政治、国民が意欲揚々と参加できる政治が不可欠なのである。そして、国民が我ら果報者と惚れ込むことのできるリーダーが。ブータン発「国民総幸福量」イコール政治改革。その道への歩みは、日本のどこかですでに始まっているはずだ。多分、国民の意に最も近い地方自治のどこかで。(敬称略)